

京都発達研究会の設立時より乳幼児部会の運営やニュース発行などに携わってきましたが、昨年、事務局長を引き継ぎました。職場はちがっていても、発達理論を基盤にもち、子どもや保護者の思いに目を向けながら発達相談を担っていく専門職集団として、研究・実践し続ける会でありたいと願っています。私は、京都市にある児童発達支援・放課後等デイサービス「ばれっと」で、施設長・発達相談員として勤務しています。今回は、療育で出会う子どもたちの姿から、幼児期後期の自我の育ちや発達の課題、さらには療育の役割について考えます。

子どもの揺れる思うともて

療育には、発達の遅れや機能障害のある子どもだけでなく、発達障害など発達のアンバランスをもった子どもたちがたくさん通ってきています。発達検査をする際は、検査項目の通過・不通過だけでなく、課題へのとりくみ方や気持ちの調整の仕方などに着目し、療育場面・生活場面と照らし合わせて総合的に子どもの姿をとらえるようにしています。外界との関係の結び方や自己調整の仕方に子どもの発達課題の根幹、すなわち「自我の育ち」と



よりあってほしい

発達をゆたかに

乳幼児期から終末期まで

第4回 子どもも大人も揺れる思いを抱えて 療育の現場から

長崎純子

児童発達支援事業・放課後等デイサービスばれっと
施設長・発達相談員

いう課題が見えてくるのです。療育で出会う子どもたちは、共通して自我の育ちの課題をもっていると考えられます。

4歳半頃の力が育つと、相手の意図や場面の意味に注意を向けながら自分の気持ちや行動を調整する力が形成されます。その過程で、相談室への入室や検査者と向き合って座ることや、課題に向かうことそのものへの抵抗感を示す姿に出会います。横にいる保護者に甘えたり、表情硬く無言で座っていたりして、なかなか課題を進められません。また、ちょっとやってみて思うようにできないと、すぐに「テキピン」「ムスカシィ」「イヤヤ」といって課題を投げ出してしまったり、自分の力を試されたり評価される場への抵抗を示したり粘り強くこらへることがむずかしい場合があります。

この時期、保護者の方からは「できないんだっただけできるよう練習すればいいのにならう」といって声をよく聞きます。しかし、大人が願う「できるよ」になってほしいこと「は、子どものなかに」できるよ」になりたいたい」といふ願いになっているのか、立ち止まって考える必要があります。特に療育に通っている子どもたちは、「やったらでき



への見通しがもてず、できないことや失敗への不安に心が揺らいでしまうため、子ども自身の願いを伴っていないことに向かうのはよりいっそう困難です。そんなとき、検査では子どもが「これならできよう」と手を出しやすい課題を先に実施します。するとみるみるうちに自信に満ちた表情に変わり、多少むずかしい課題を提示しても挑戦する姿が出てきます。手応えを積み重ねたり、できたよころびを検査者と共感しあうなかで、「やってみよう」という気持ちが生まれてきたのです。

「できるよ」になりたいたい」「やってみよう」という子ども自身の願いが育つためには、楽しかった経験、不思議だった経験、おもしろかった経験など、さまざまな手応えを感じられる経験が不可欠です。そしてそれを一緒に感じてくれる人がいた経験があつてこそ、葛藤を乗り越えようとするエネルギーが芽生えてくるのではないのでしょうか。

また、発達障害や発達のアンバランスのある年中・年長児の多くは、一番になると・勝つこと・できることへのこだわりの強さと、できなさそう・負けそう・むずかしそうなことを過敏に察して避けようとする姿が同時に見られます。でもその表現の仕方、やりやすい・心ざける・甘える・怒る・他者を攻撃する・かたくなに抵抗するなどさまざまです。ときには活動の妨害をしてしまったり友だちとトラブルになることもあります。そのような場合、「この場面ではこう言っていけない」「こう対応しなければいけない」と方法を教えることは大切なのですが、ルールの理解はできたり他人のまがいは気がついて指摘したりするのに、その子自身の行動にはその知識や気づきが生かされていないということがあります。でも、「わかる」といって「できる」と「の間には、実は大きな差が